

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

環境―家族―家柄（承前）

マーラー家の人々は、この地方の大半のユダヤ人と同様、田舎の小さな村や町で商売をして暮らしていた、それはユダヤ人に対して、もっと有利な商売が出来るはずの都会に近づくことが禁じられていたからである。おそらくそのためにアブラハム・ボンディ¹⁾、彼の後を嗣いだ婿のジーモン・マーラー、孫のベルンハルトは酒造業兼居酒屋を生業として選んだのだろう。昔からアルコールの販売権と居酒屋の経営権はユダヤ人に与えられた数少ない権利の一つに数えられている。彼らがこの商売を選ぶのは必要に迫られてであって好みの問題ではない、というのは、大半のユダヤ人は自分の家で強いアルコール飲料を飲むことが禁止されていたからだ。

1843年²⁾、ジーモン・マーラーは相変わらず居酒屋の主人であるが、1865年7月14日72歳で彼が死亡したとき、彼の死亡証明書には職業が小間物商となっている。実際1860年に、ジーモン、マリアのマーラー夫妻はカリシュトを離れ、そこから25キロ程離れた小都市ドイッチュ・ブロット〔現 Havlickuv Brod〕に定住する。この町に彼らは小間物店舗と庭のある家を買っておいたのだった³⁾。ここでジーモンは死ぬことになるし、おそらく妻のマリアもここで死ぬが、彼女の死亡通知は発見できなかった。

マーラーは彼の祖母を《男性的》な活力を持った女性のように描いていたが、彼女に関して彼の語ったものはすべて、彼の家族に残された祖母の思い出が彼に語られることによって誇大化されたものだろう。彼の話では、生涯彼女は行商して歩き、死ぬまで背中に背負い籠を担いで歩き回っていたらしい。しかしジーモンの死んだ1865年には、イーグラウに定着してすでに生活の安定を享受していたベルンハルトが、未亡人となった母にそんな外聞を憚るような商売をさせたままでは認めがたい。マリア・マーラー⁴⁾が店の小間物を軒から軒へと売り歩いて、家計の足しにしようと思っていたのは、彼女の夫の存命中のことであったとするほうが可能性としては高い。

このマリア・マーラーについては一つのエピソードが語られてきたが、それはマーラー自身が語ったものである。すでに高齢に達していた彼女が、彼女の職業について取り決められていた法規の一つに違反し、地方裁判所から罰金刑を科せられたことがあったらしい。ところが彼女は挫けることもなく直ちにウイーンに赴き、皇帝陛下の謁見を要求し

* 一般教育 専任講師 フランス語

た。マーラーによると、この皇帝は君主の中でも最も民主的であってマリアの謁見を認め彼女の罰金刑を取り消してくれた。マーラーの伝記の大半が、彼の大胆不敵で精力的な性格が彼の祖母から受け継がれたことの証拠としてこのエピソードを用いている。彼の祖母の不敵な眼差し、意志の強そうな顎は、イーグラウで取られた写真によって不滅になっている。

彼女の息子ベルンハルト・マーラーは1827年8月2日、カリシュトで生まれたとされるが、リプニッツ⁵⁾とする方が可能性は高い。彼はその母に劣らず意志が強かった。生涯彼は社会的な地位の向上を望み、自分の教育を完全なものにする願望を持ち続けた⁶⁾。マーラーの言うところでは、彼の父は先ず車引きから始めたが、決して読書に対する情熱を失うことはなかった。彼は荷車を引いているときでも本をむさぼり読んだ、その中にはフランス文法書さへあった。まさに《kutschbockgelehrter》[字義通りには《荷車の御者台の学者》]と言うあだ名がふさわしい。このエピソードはマーラー家の人々から得たものであるが、1850年付けイーグラウの外国人調書でも確認される⁷⁾。それによると、ベルンハルトは三月に四度もイーグラウのホテル・チャップ[Czap]に泊まったことが特記されている。この資料には、彼の職業がカリシュトのBranntweinhändler[ブランデー商人]と記されている。荷車で商品を運びながら販売していたからだろう。

家族の言い伝えでは、彼はつぎに店員として雇われ小さな製造所で働き、ついで家庭教師をしながら貯金をして、ついに一軒の慎ましいカフェ[Wirtshaus]⁸⁾を独力で買取ったが、《その占有者は何人も、ウンタークラロヴィッツ酒造所のワイン、ビール、ブランデーを仕入れ、どこよりもほぼクロイツア安く[高級な販売所に]転売しなければならぬ》⁹⁾だった。

この商売が慎ましいものであったにしろ、ベルンハルトは30歳になって自分の夢を一部実現した。彼は今や自分の店を持ち、ほとんど小市民と変わりなく、そこで結婚を考えるようになる。この結婚は世間で言う《妥当な結婚》である。将来の父であるアブラハム・ヘルマンはかなり繁盛した石鹼屋[Seifensieder《石鹼製造業者》]で、カリシュトから数キロメートルのレデッチュ[Ledeč]に住んでいた。アブラハムは少なくとも七人の娘の父だった、そのため、婿の社会的身分について事細かに調べ上げるなどということはしなかったに違いない¹⁰⁾。

アブラハム・ヘルマンは、スニエットのイサーク・ヘルマン(1766—1834)とハベルンのサラ・スピッツの息子であり、若い未亡人と結婚したが、この女性は彼と同じ姓を持っていることから、おそらく遠い親戚に当たると思われる。そのテレジア・ヘルマンはノイツァークヴェーのマルクス・ヘルマンとカロリーネ・メッツェルの娘であり¹¹⁾、レデッチュで商をしていたヨーゼフ・ヴァイナーの妻であった。しかしアブラハム・ヘルマンが彼の結婚を合法化することが出来たのは、マーラーの母である次女が生まれた後の1837年12月7日のことであった。以下に彼の子供のリストを掲げる¹²⁾。

フランツィスカ 1835年4月25日以前にレデッチュにて誕生、1835年7月7日死亡。

マリア 1837年3月2日誕生、ベルンハルト・マーラーと結婚、1889年10月11日死亡。

アンナ	1838年8月8日以前に誕生。(ヴラッシム郡) パウロヴィツクの地主イグナーツ・フランクと結婚。彼女はおそらくグスタフ・マーラーが後にウィーンやペテルスブルクで良く会った従兄弟のグスタフ・フランクの母に違いない。
ロザリア	1841年2月3日以前に誕生。1859年、レデツチュの商人ナタン・ケルンと結婚。
アントニア	1843年4月14日以前に誕生。
ヨハンナ	1845年2月26日以前に誕生、1846年8月10日死亡。
バルバラ	1847年1月26日誕生。

権威的で短気なベルンハルトに対して十歳年下のマリーは優しくおとなしい内気な人だった。マリア、もしくは後に彼女が呼ばれていた名で言えばマリーは、少し足が悪く、器量良しと言うわけにはいかなかっただろう。それで彼女はそれまでそれ程良くは知らなかったベルンハルトと親に強制されて結婚した。いくら彼女が「年は離れているし他に好きな人がいる」と言い張っても、「もっと良い相手を見付けることなどできない」と反論されるばかりであった。

1月15日と17日にそれぞれフンボルクとチャスラウ¹³⁾の役場から結婚の許可が下りて、結婚式は1857年2月18日にレデツチュで行われた。若夫婦はカリシュトに戻り居酒屋の住居部分に居を構える。この建物は1937年に火災で全焼したが壁だけはほとんど無傷で残った。家は再建され、今日ではほとんど昔のままの姿が残されている。マーラー自身の言っている、窓にはガラスすらなく近くの沼は不衛生窮まりない、単なる田舎の家¹⁴⁾とはどこを取っても似てはいない。市民的とは言わないまでも充分立派なものであり、そこでカフェを開いていたのは納得される。風の吹き抜ける荒屋ではカフェはできはしないだろう、とはいっても彼は、両親が結婚当初ならば住んでいたかもしれないような、もっと仮住い風の家を知っていてそれを言ったのかもしれない。それとも、たたき上げの人間が多くそうである様に、彼もまた、辿ってきた道程の長さを大げさに言いたかったのかもしれない。

マリアとベルンハルトのマーラー夫妻は《火と水》のように似ていなかった（こう言ったのはマーラー自身であると彼の妻アルマが証言している）。夫はがきつで妻は優しい。マリーは華奢で繊細だった、恐らくベルンハルトが彼女に結婚の申し込みをする決心したのは、その《貴族的》な脆弱さのためであっただろう。カリシュトの、夫の仲間内では《公爵夫人》[Die Herzogin]と皮肉られていたマリーは静かで控えめに生活していた。アドルフ・フィデリ¹⁵⁾という彼らの甥がこの夫婦について次のような思い出話を残している。「少年の頃、私はこの類稀な女性を崇め偶像化していました。彼女は聡明で思いやりのある天使のような人でした。教養という点でも当時の平均的なブルジョワ女性の水準を擡んでいました。その目は優しさと慈愛に輝き、その声は何か人を魅惑するもの、そう、この俗世間から身を清めてくれるような何かに溢れていました。その全存在、全人格が輝いて魔法のように人を魅了したものです、誰もその魔法から逃れることは出来ませんでした、勿論私はその例外ではあり得ません、と言っても、私には御馳走が魅力だったと

も言えます。毎日のように伯母のところに通ったものですが、行く度に私の誕生日でもあるかのように迎えてくれました…

「マーラー夫人は運命に忍従を強いられた典型的な『悲しみの聖母』でした。何人もの子供を死なせ、自身は際限のない妊娠のおかげでやつれはて、それでも愚痴一つこぼさずすべてに耐えたのです。グスタフ・マーラーがその性格、その気質を受け継いだのは、彼の父親であったことは間違いありません。ベルンハルト・マーラーの中にあるものすべてがゆるぎのない意志の力を表現していました、それは擗猛なものにまでなることも稀ではなく、とりわけ自分の計画を実現しようとなると、激しいものになりました。まさに亭主関白でいつも暗く、屁理屈を良くこね、満足することなど無かったようでした。私は彼に対して限りのない敬意を抱いていましたが、彼の暗い目で凝視されてしまうと、そんな敬意も恐怖に変わってしまったものです。はしゃぎまわりでもしたら、しまいには追い出されもしました、優しさのかけらもなかったのです。でも彼は実直さを美德とした商人でしたから、自分の家で醸造したアルコール製造業は繁盛しました…」

これは同時代人によって描かれたベルンハルトである、それはいわば気難しさと専横によって孤独になってしまった陰気な人物の姿であり、妻を苦しめ、子供から恐れられた頑固親父の姿ではあるが、彼は断固としてどのような犠牲を払ってでも彼自身の受けられなかった教育を子供達に与える決心をした。

1843年の記録によると¹⁶⁾ 当時のカリシュトには60軒ばかりの家があり、ほぼ500人の住民が住み、その三世帯がユダヤ人家庭だった。教会、Lokaliste Wohnung [集会所] がそれぞれ一つ、裏が醸造所の居酒屋と Wirtshaus [宿屋またはカフェ] が各一軒あった(最後の二つの建造物はジーモン、ベルンハルト・マーラーの所有物)。この時代すでに古い城は消失していた。一つだけ言えることは、このような小村にいたのでは、ベルンハルトにとって、偉人になるという彼の夢を実現するどんなチャンスもあり得なかった。

すぐに子供が生まれる。長男イジドールは1858年に生まれ翌年事故死する、続いて1860年7月7日グスタフが生まれ、彼らの誕生によってベルンハルトの中で、自分の子供をきちんと育て教育するために、自分自身の身分を向上させようという欲求が芽生え彼を鋭く刺激した。1860年秋、彼は長い間待ち望んでいた特権を得る、それはフンボレックで発行される一種のパスポートであり、四年間有効だった¹⁷⁾、そのおかげで、彼は家族ともども10月22日イーグラウ [Jihlava] に移った¹⁸⁾。イーグラウはモラヴィアにあり(ボヘミアの)カリシュトから35キロばかりのところに位置する。彼がそのとき居住したアパルトマンは、後に彼が買って残りの生涯住むことになる家屋に隣接し、ピルニッツァガッセ265(または4)番地¹⁹⁾にあり、恐らく前世紀に建てられた都会的で市民的な大邸宅だった。明らかに彼は以前よりも良い状態で醸造業を営むことになったのである。

実際イーグラウはブリュンとオルミューツに次いでモラヴィア第三の都市なのである。樹木の生茂った谷の麓にゆったりと横たわる、平和で陽光の溢れた絵のような町で、隘路はその殆どが、市庁舎の建物が面した市場の開かれる大きな広場に向かって収斂している。イーグラウはその繁栄を、ウィーンとプラハの中間に位置していること、それと近く

79
(44) に鉾山があることに負っている。当時の住民はほぼ25000を数え、ピロードの製造、製織を商いとして暮らしていた。チェコにおけるドイツ文化の中継点だったイーグラウには、

高等学校と劇場がそれぞれ一つあり、新聞社が数社もあった。音楽は昔から盛んであり、16世紀には、《マイスタージンガー》のパウル・スペラートゥスがここに音楽学校を開いた、この学校はニュルンベルクの音楽学校の分校として1620年まで残存していた。1717年ドイチュ・プロットに生まれたシュターミッツ家の長男〔チェコ語では、Jan Vačlav Stamič〕はイーグラウでイエズス会系の高等学校で勉学し、25歳になるまで彼の生まれ故郷で過ごす。マンハイム楽派の基礎を置き、いわば交響曲芸術の創始者の一人であるこの人物が、未来の後継者、ドイツの伝統音楽の最後の交響曲作家と同郷であったことを思うと不思議な感にうたれる。しかもドゥセック〔Dusík〕とスメタナも修業時代の一時期をこのイーグラウで過ごしていた²⁰⁾。この田舎の「音楽院」は当時も相変わらず盛んで、例えば1827年のシーズンでは、ベートーヴェンの『フィデリオ』と『交響曲第二番』という注目すべき二つの《新作》がプログラムにのった²¹⁾。

イーグラウの警察調書²²⁾によって、ベルンハルト・マーラーの職歴を正確に描くことが出来る、そればかりか、間接的ではあるが、彼の性格も知れよう。彼は驚くべき粘り強さで徐々に商売を拡張し、数々の難題を乗り越えている。10月23日イーグラウに移ったベルンハルトは、一週間後、甘味アルコール醸造業の開業とその製品を自分で売り捌く許可を願い出ている。しかし当局は、すでに開業しているこの種の業者の数を引き合いに出して拒絶する。そのかわりに10月29日、彼は食料品店の開業権を獲得する。

それで終わってしまう彼ではない、今度は搦手から攻め、カタリナ・プロットなる女性が所有しすでに開業している居酒屋の賃貸借契約を彼女と取り結ぶことを当局に知らせている。一月後当局は甘味アルコールの製造と瓶売りの権利を彼に許可するが、量り売りの許可については今度も拒絶する。三月後の1861年6月16日、今は「食品業者」の肩書きを持つベルンハルト・マーラーは、彼に対してパンの販売を禁じている法令を無効にするよう要望している。といっても、彼は自分の商売にパン屋を付け加える許可を正式に獲得する気はさらさらなかったのだろう、警察調書によると、8月には、再三の警告にも拘らず無許可でパンを販売した廉で、彼は5フロリンの罰金が課せられてしまう。同年彼は醸造所の移転を願い出ているが、これもまた、既成事実を作ってから要望を出したようだ。だから彼は、申請に関する法に違反したとして、罰金2フロリンが課せられた。

1863年ベルンハルトの財政状態は突然悪化する。醸造業とパン販売業を手放すことを申告しているが、それは税の支払いに束縛されないためで、一時的なものに過ぎない、というのは、その後も相変わらず彼の名前でそれらの業種が続けられているからだ。これ以後年ごとにベルンハルトの事業は拡大発展していく。アントニア・メリオンの所有するカフェを借り受ける権利は、拒絶されたとしても、五年後には又借りによってその権利を獲得できるようまくことを運び、その間にも、他の幾つかのカフェを吸収合併しようと画策し、そうして徐々に競争相手を少なくしていったのである²³⁾。1866年再び罰金刑を受ける、今度は、ある警部が彼の居酒屋で客と酒を飲んでいる四人の娼婦を見付けたからで、この地域では娼婦の出入りが許されていなかったのだ。

翌年ベルンハルトは事業規模の拡大と、二年前にイーグラウに来ていた弟のダーヴィット²⁴⁾を出資者に加えることを願い出ている。この要望は却下されたが1868年、これ以後彼の様々な商売のわけ隔てなく制限なしに、彼の商品すべてを小売りできる権利を獲得す

る。1872年恐らく彼の事業はかつてなく繁盛したのだらう、イーグラウに第二の醸造所を作る権利を得ている²⁵⁾。

イーグラウに移り住んで13年たった1873年、ベルンハルトにとうとう市民権 [Bürgerrecht] が与えられ、彼はそれを非常な誇りとし、証書を額縁に入れて居間の壁に飾った。以後彼は町の裕福な市民階級に属し、陪審を勤め、数々の慈善協会の賛助会員になった。今こそ彼は己の夢を実現したのだ。1870年から1875年の間に、新しい支店を2軒と食酢醸造所を開いてもいる。イーグラウの古文書によれば、ベルンハルトの社会的身分はかつて考えられていたよりも、比較にならないほど輝かしいものだった。1869年には自宅に、居酒屋で働いていたレジ係や給仕女はいわずもがな、乳母、女中、料理女を住まわせていた。1889年に彼が死んだとき、彼の住居や総在庫高も含め、彼の商いは2万8千フロリンだった、しかもこれは相続税の総額を減らすために最少に見積もられていたことは確かだ。

マーラーは彼の父の融通のきかない荒っぽい性格について良く語ったものだが、イーグラウ警察の調書によって、それは証明される。1869年12月7日、ベルンハルトは10フロリンという高額の前金刑を受けた、それは《県警察長官シュレッターに対し侮蔑的な態度をとった》からだ。

マーラーの家族の間ではベルンハルトの居酒屋 [Schank] のことを余り話したがらなかった。栄光の頂点に達し、人々が彼の家柄について関心を持ち始めた頃、マーラーは父の《商売》がどんなものか一言も示さずに、ただ御寛恕を願うだけだった。家族は醸造所を《工場》と言うのが習慣だったが、それもベルンハルトが殆どの収入を得ていた葡萄酒と酒類を販売する店²⁶⁾と飲料の小売店がそれと一緒にいたのも明らかだ。ところがベルンハルトはカフェの運営を使用人に任せていたので、彼がカフェのカウンターに現れるのは殆ど稀なことだった。

ベルンハルト・マーラーは、その物質的成功とそれによって出来た暇な時間によって、もう一つ別の夢を叶えた。彼は居間の賓客席として《古典と現代の書棚》を作り、それはイーグラウにあっては数少ないものの一つだった。だから読書は家庭生活にあって第一等の地位を占めていたのは疑いない。こういったゆとりは、世間にもよく知れ渡り、しかも大いにひけらかしていたものであろうが、ベルンハルトには厳しい規律にしたがって彼の子供を育てるのに何ら邪魔になるわけではない。成り上がりの人間に多く見られるように、彼は、彼の子供が出発点において、彼よりも好条件であってはならないと考える。だからグスタフがウィーンにやって来て、直ぐにしなければならなかったことは、家庭教師をしながら自活することだった。

直ぐにマーラー家は大家族となった。14回も妊娠したことでマリーは、たとえもし彼女が並外れて丈夫な体をしていたとしても、その肉体を使い果たしてしまったことだらう。さて、彼女は3人の娘と11人の息子を生み、その殆どは低年齢で死亡してしまった。

(1) イジドル Isidor

1858年3月22日生まれ、1859年カリシュトにて事故死。

(2) グスタフ Gustav

作曲家、1860年7月7日－1911年5月18日。

(3) エルンスト Ernst

1861年－1874年4月13日13歳で心膜炎 [Wassersucht] で死亡²⁷⁾。

(4) レオポルディーネ Leopoldine

(1863年3月18日－1889年9月27日) 1884年もしくは1885年にルドヴィヒ・クヴィットナー (Ludwig Quittner (1860－1923)) と結婚、26歳のとき脳腫瘍もしくは髄膜炎でウィーンにて死亡。子供は二人、アンナ Anna (1885年11月4日－1941年5月21日)、ハインリッヒ Heinrich (1887年3月9日－1962年1月26日)。

(5) カール Karl

(1864年8月27日－1865年12月18日イーグラウ) 彼はイーグラウのユダヤ人出生名簿 [Jüdische Geburtsmatrikel] には記載されていないが、警察調書にはその消息が見出だせる。

(6) ルドルフ Rudolf

(1865年8月17日－1866年2月21日イーグラウ)

(7) ルイ、またはアロイス Louis, Alois

(後にハンス・クリスチャン Hans Christian と改名、1867年10月6日－192?年)、父の店の会計係 (イーグラウ、後にウィーンで)。ボフミラ・メルグル Bohumila Mergl (1862年3月18日ウィリモフに生まれる) と結婚。1907年ごろアメリカに移住して、ウィーンのキャンディー会社 Heller の販売代理をし、恐らくシカゴで死亡、ここではパン屋だった。随分調査したのだが筆者には彼のアメリカでの足跡を見付けられなかった²⁸⁾。

(8) ユスティーネ Justine

(1868年12月19日－1938年)、1902年2月10日著名なヴァイオリニスト、アルフレート・ロゼー Alfred Rosé (1863－1946) と結婚。子供は二人、アルフレート、アルマ Alfred, Alma。

(9) アーノルト Arnold

(1869年12月19日－1871年12月15日)、猩紅熱で死亡²⁹⁾。

(10) フリートリッヒ Friedrich

(1871年4月23日－1871年12月15日)、猩紅熱で死亡。

(11) アルフレート Alfred

(1872年4月22日－1873年3月6日イーグラウ)、肺水腫 [Lungenwassersucht] で死亡。

(12) オットー Otto

(1873年6月18日－1895年2月6日)、音楽家。劇場指揮者の経歴を始めようという時ウィーンで自殺。

(13) エンマ Emma

(1875年10月19日－1933年5月15日)、1898年6月2日チェリストのエドゥアルト・ロゼー Eduard Rosé (1859年3月29日－1943年2月テレジエンシュタツ

ト) ヴァイオリニストの弟、と結婚。ボストン、ウィーン、ワイマールに住む。子供は二人エルンスト、ヴォルフガング Ernst, Wolfgang (1907年4月10日生)。

(14) コンラット Konrad

(1879年4月17日—881年1月8日)、ディフテリアで死亡³⁰⁾。

このリストはマリア・マーラーの過酷な運命を表している。彼女は次々と8人の子供を亡くしてしまう。彼女の脆弱な健康はこのような肉体的、精神的試練に長いこと耐えられなかった。マリー・マーラーは1889年に死ぬ、彼女の夫が死亡した半年後、51歳だった、彼女の息子グスタフよりも一年長く生きてただけだった。

1) 19世紀初頭カリシュトの商業はアブラハム・ボンディという人物の手になっていた。この名前はマーラーという名前よりもかなり一般的な名ではあったが、この人物がベルンハルトの未来の義父であった可能性はないわけではない。

2) ゴフィーの生まれた年。

3) Deutsch Brodの Obervorstadt 所在 (n°41) のこの家は990フローリンだった (Stadtarchiv Telc. Bezirksgericht Deutsch Brod, VI 290/1860)。

4) マーラーの母もまたマリアであった。以上のエピソードはベルンハルトの祖母に当てはまるかも知れない。しかし我々は今のところ彼女については何も知らない。

5) イグ라우で作成された文書 (Anzeigblatt zur Zählung der Bevölkerung nach dem Stande vom 31. Dez. 1869, Haus n° 265, I. Stock) に、ベルンハルトは彼の生誕地を自筆で Lipnice (リブニッツ) と記した。さらに彼は1848年書類を取るために Lipnice の役所に手紙を書いている (Archivsrepertorium Lipnice im Stadtarchiv Iglau)。

6) チェコ語で書かれた記事 (Jihlavské Listy, Iglau, n°12) で、マーラーの友人の父であったウラディミール・ウルバネック (Wladimir Urbanek) は、ベルンハルト・マーラーはヴァイオリンを演奏し、行商しているとき片時も忘れずヴァイオリンを持ち歩いた、と書いている。これはベルンハルトと音楽に関する唯一の証言であるが、信頼に値するものと思われる。

7) Fremdenprotokoll 1858 (Stadtarchiv Iglau)。

8) Wirtshaus は、飲み物に加えて、軽食や冷たい食事を出すと言う点でカフェ [Schank] と異なっている。

9) Cf. Grundbuch zu Unterkralowitz (II, lit. H, fol. 43v) Auszug aus dem Grundbuch... (Stadtarchiv Telc.)。

10) マーラーの母の娘時代の姓がアルマ・マーラー「グスタフ・マーラー—回想と手紙」(p.13) とハンス・フェルディナント・レートリッヒ「ブルクナーとマーラー」ではフランクと間違えて記されている。フランクという人物と結婚したのは彼女の妹のアンナである。

11) ドナルド・ミッチェル(「グスタフ・マーラー—初期の時代」)はヘルマンという二人の祖父母の結合にマーラーの何人かの兄弟に見られた神経と肉体のバランスを欠いた体質の主要原因を見た。

12) Stadtarchiv Prag. Pfarramt Ledec n.S. Judengeburtsbuch I. Sign: HBH 366.ユリウス・シュタインベルクの記事によると (Prager Abendblatt, 1911年5月17日) マリー・マーラーの姉妹の一人が、《彼女はシュラウで夫を悲劇的に失った》のだが、子供を連れてプラハに移住した。彼女は皇帝との謁見を得て皇帝に自分の惨状を訴え煙草と新聞の販売権を与えられた。以上の話は、おそらく、マーラーの祖母について家族のものたちが皆語るあの有名なエピソードの起源であろう。

13) それぞれカリシュトとレデツェのある県の県庁所在地。

14) ナターリエ・パウアー=レヒナー「グスタフ・マーラーの思い出」(p.52)

15) Neues Wiener Journal (1923/4/25) 参照。アドルフ・フィデリは《グスタフ・マーラーの両親》と題した小文で彼の祖母はマリー・マーラーの異父姉妹であったことを明らかにしている。テレジア・ヘルマンは最初にヨーゼフ・ヴァイナーと結婚したのだから彼女はその時に生まれた娘のことかも知れない。フィデリによるとベルンハルト・マーラーはフィデリの母の結婚のお膳立てを多少ともした、そして彼の父の会社で、後に輝かしい成功をおさめることになる履物商人という役割をイグ라우で果たした。

16) J.G.SOMMER, Böhmen (Cesaslauer Kreis), Topographie, p.97. Prague, 1843.

17) このパスポート [Heimatschein] はユダヤ人に対し、居住地を変える権利を与えたものであった。1865年、その書き換えのとき、ベルンハルトは擬制的にイグ라우を離れなければならなかった。

18) この引越しに関しても示されてきた日付の殆どは根拠の無いものである。ベルンハルトがイグ라우に着いたとき作成された警察調査が幸い残っており、以上の正確な日付が付いている。(cf. Stadtarchiv Iglau: Vormerk über die hierorts domicilirenden und Handel treibenden Judenfamilien, angefangen vom 14. Dez.1859)。

19) この二つの数字は次のように説明される。カリシュトやイーグラウでは、恐らくこの地域のどこでも、都会の住居は、以前それが建築されたときに付けられた整理番号になっていた。通りの番号を付けるようになったのは、後の時代になってからである。このビルニツァガッセは1878年以降ウィーナーガッセになり、1918年にはツナイマーガッセ、第二次大戦後はマリノフスキーガッセとなった。

20) Johann STAMITZ [または Steinmetz] : 1717年ドイッチュ・プロットに生まれた。ヴァイオリニスト、指揮者で有名な音楽一族シュターミッツ家の基礎を置き近代的な器楽楽派を創始した。この町の歌手の息子で、1728—1729年と1733—1734年にイーグラウのイエズス会系の高等学校に在籍し、後に有名な《マンハイム楽派》を形成して1757年にこの町で死んだ。

Johann Ladislav DUSSEK [または Dusfk] : ピアノの巨匠、作曲家 (1760 クサスラウ—1812 パリ)。

Friedrich SMETANA (1824—1884) : チェコの国民楽派の基礎を置く。マーラーの好んだ作曲家の一人。

21) Cf. FISCHER : Das Musikleben Iglau im 19. Jahrhundert : Zeitschrift des deutschen Vereins f.d. Gesch. Mährens u. Schlesiens (J. 36, Brünn 1934, S.105ff).

22) Stadtarchiv Iglau. Einreichsprotokoll in Politicis 1860 ff

23) それらのカフェの持ち主はそれぞれ、カタリナ・ブラーベンツ (旧姓ロット)、マティアス・ヴィルヘルム、ヨハン・フリーデル、ヤコブ・レーヴィット (メリオン)

24) グーヴィット・マーラーは順に小間物屋 (1863)、居酒屋 (1864)、食料品店を開く。

25) Gewerberegister der K. Stadtgemeinde Iglau.

26) 1866年1月7日の Iglauer Sonntagsblatt にのった広告に様々な愛飲家に対し、ベルンハルト・マーラー醸造所は最高銘柄のフランス製葡萄酒とリキュールをお届けいたします、と書いてある。

27) エルンストの正確な出生日は判明していない。イーグラウの公的資料にも新聞にも彼の消息を見つけれない。ハプスブルグの君主国内で十年ごとに行われた家長によって記載される報告書 [Conscriptionsbogen] によると、彼は1861年に生まれた。

28) この話はアンナ・マーラー夫人から得られたものだが、アメリカ合衆国でその真偽を確かめることは難しい、アメリカでの警察調書はかなり不完全な形で付けられている。

29) アーノルトとフリートリヒの死亡通知は、12月14日のイーグラウの新聞 Der Vermittler で公示された。この日付は市民台帳に15という日付で記載されてたものである。

30) マーラーの初期の伝記作家は今まで子供の総数を11か12としてしか挙げてこなかった。以上の完全なリストはイーグラウの古文書を基礎にしている。14という総数はナタリーエ・パウアー＝レヒナー『マーラー語録』によって確認されている。また、ルドルフ・メンゲルベルクの小冊子のなかに、ユスティーネ・マーラーの御息、アルフレート・ロゼー氏が発見した彼の母の筆跡による注記があって、それによっても確認される。

Title : Milieu-Famille-Origines in Gustav MAHLER vol. I, Les chemins de la Gloire 1860-1900.

Author : Henry-Louis de Grange.

© 1979 Librairie Arthème FAYARD.